岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第19号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.19
63－66, March 2017

報告

世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望

College Students' Opinions about High School World History Courses
and Implications for Future Research

吉原秋[*1]，小川春美[*1]，鈴木道也[*2]，安井萠[*3]，小川知幸[*4]，畑奈保美[*5]，津田拓郎[*6]，池野健[*4]
Aki YOSHIHARA , Harumi OGAWA , Michiya SUZUKI , Moyuru YASUI ,
Tomoyuki OGAWA , Naomi HATA , Takuro TSUDA and Takeshi IKENO

Keywords: *World History Education, Liberal Arts, University Entrance Examination, Motivation, International Posture*
世界史教育，教養教育，大学入学試験，動機づけ，国際的志向性

1. はじめに

「グローバル化する社会に対応できる国際的な人材の育成」という掛け声が文部科学省からも大学側からも盛んに掛けられている今日、異文化やその歴史に対する理解を促す教育の必要性も高まっているはずである。いわゆる「世界史未履修問題」を契機として、外国史を専門とする大学の教育・研究者の側から、高等学校における世界史教育のあり方、および、大学教育・歴史学研究との接続について検討する取り組みが積極的になされてきている。その一方で、文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会は、平成28年8月に高等学校課程における「歴史総合（仮称）」の設置を答申し、議論を呼んでいる。詳細は小川ほか（2017）を参照されたい。

本研究グループの課題は、上記のような今日的状況と課題を踏まえた上で、大学が高等学校での世界史教育と連携した教育ないし研究のための実践的方途の探求を目指すものである。その前提作業として、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方の大学・短期大学の教員の協力を得て、現在の大学生が、高等学校在学中に世界史Ａ、Ｂのいずれを履修したのか、大学受験時に世界史科目を選択したのか、という実態と、世界史学習の意義をどのように考えているのか、という意識とについて、質問紙による調査を実施した。この調査結果に基づいた試行的報告として、本報告に先立つ吉原ほか（2016）および鈴木ほか（2016）が、岩手県立大学盛岡短期大学部、東洋大学での回答をそれぞれ報告、分析している。本報告は、調査全体の結果を記録するとともに、今後の研究の方向性を展望する。

今後の方向性としては、学生の外国史学習意欲を促進あるいは阻害する要因を解明し、どのような契機が教育的効果を発揮するのか、を明らかにすることが有用であると考える。そのための方策として、学生の世界史学習への意欲、態度を個別に調査し、高等学校での効果的な授業を観察する等が考えられる。そこから、高等教育機関としての大学での歴史教育と高等学校での世界史教育との有機的連関のための実践を見出すことができるのではないか。既に先行研究として小田中（2007）があるが、本報告ではとりわけ学生の「国際的志向性」に注目し外国語学習の動機づけと関連づけた展望を述べる。

2. 調査の概要

調査は、執筆者および協力教員によって、それぞれの担当授業を利用し、平成27年5月から12月にかけて実施された。調査の対象となった学生は13校に所属する1,850名である。回答数の内訳は下記の表の通りである。

表１：調査実施校および実施授業と回答数（50音順）

学校名	実施授業名	回答数
愛知大学（全学共通科目）	歴史学	257
愛知大学文学部人文社会学科	ヨーロッパ文明史	102
愛知県立大学外国語学部	研究各論（ドイツ史）	13
岩手大学（教職科目）	教育心理学	209
岩手県立大学社会福祉学部	法学Ⅰ	101
岩手県立大学盛岡短期大学部	キャリアデザインⅡ	119
近畿大学経済学部経済学科	日本経済史Ⅰ	156
尚絅学院大学総合人間科学部（全学共通科目）	西洋の歴史	226
尚絅学院大学総合人間科学部子ども学科	子どもと地域社会	91
椙山女学園大学国際コミュニケーション学部	ヨーロッパ史	84
仙台徳洲看護専門学校	社会学	45
東北大学（全学共通科目）	大学生のレポート作成入門――情報探索から執筆まで――	46
東洋大学文学部	地域史Ａ（西洋）	251
名城大学人間学部	西欧文化史	26
山形県立米沢女子短期大学	文献情報学・書誌学	76
計		1802

本調査の対象は、大学、短期大学、専門学校の学生を含んでいる。本研究グループの構成員の多くが歴史学専門

[*1] 国際文化学科、[*2] 東洋大学、[*3] 岩手大学、[*4] 東北大学、[*5] 東北学院大学、[*6] 愛知県立大学

であるため、実施授業に歴史系科目が多く見られる。歴史学専攻の学生を対象としているわけではなく、他の人文社会系のみならず自然科学系の学生も混在しているが、いわゆる文系の学生の回答が多いことは否定できない。配当学年、履修者の学年については、1年から4年までを含んでいる。回答者の重複はない。本報告では回答者の属性で分類することはせず、全数を集計して記録するものとする。

3. 調査結果

質問内容と回答結果は以下のとおりである。

なお、質問項目の6番と7番は自由記述の回答であり、本報告では1番から5番までを集計して示す。

1．高校在学時に世界史を履修しましたか。

	全体(N=1802)
① はい	1615（90%）
② いいえ	165（9%）

（無回答あり）

2．1．で「はい」と回答した方に伺います。履修した世界史の科目はどれですか。

	全体(N=1614)
① 世界史A	844（52%）
② 世界史B	770（48%）
③ わからない	108（7%）

（選択肢①と選択肢②との複数回答あり）

3．大学入学時の入学試験（センター試験含む）で地歴・公民の科目を受験しましたか。あてはまるものに○をつけてください。（在学中の大学には限定しません。）

	全体(N=1593)
① 受験した	1002（63%）
② 受験しなかった	575（36%）

（無回答あり）

岩手大学ではこの設問を省略して実施したため、その回答数を除いた1593が母数となる。

4．3．で①と回答した方に伺います。そのときに受験した科目はどれですか。（複数回答可）

全体(N=1211)			
①世界史A	36(3%)	②世界史B	399(33%)
③日本史A	80(7%)	④日本史B	540(45%)
⑤地理A	19(2%)	⑥地理B	163(13%)
⑦現代社会	302(25%)	⑧倫理	150(12%)
⑨政治・経済	255(21%)	⑩倫理・政治経済	99(8%)

3．①1002に岩手大学の回答数209を加えた1211が母数となる[1]。

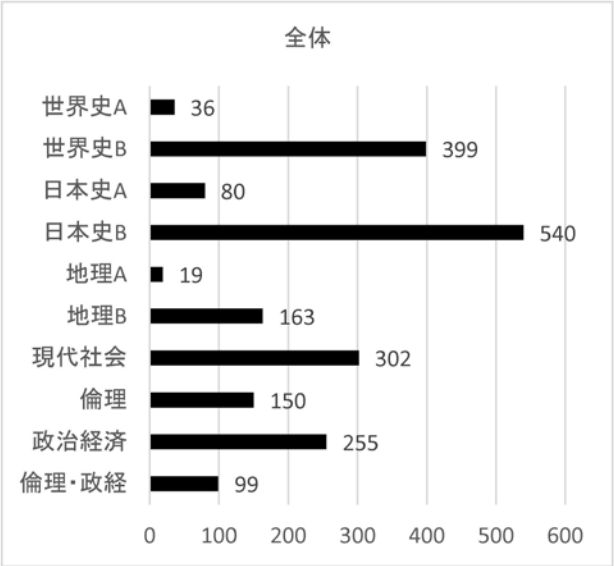

図1：大学入学試験での地歴・公民各科目の受験者数

5．高校で世界史が必修科目なのを知っていますか。

	全体(N=1802)
① 知っている	1128（63%）
② 知らない	614（34%）

（無回答あり）

6．高校で世界史が必修科目なのをどう思いますか。

7．世界史を学ぶことはどのような役に立つと思いますか。

6番と7番の回答については、本報告では個別に列挙することはせず、全体的な考察のみ述べる。すなわち、安井（2011）、吉原ほか（2016）で述べられているように、世界史学習の必修化および意義を「国際化」、「一般常識」、「何かの役に立つ」などのキーワードを基準に判断する傾向が見られる。回答者の属性が多様であると同時に、サンプルとして標準化されたものではないので、これ以上詳細な分析は行わない。しかし、固有の属性に注目して個別の対象群を考察していくことは可能である。吉原ほか（2016）、鈴木ほか（2016）、小川ほか（2017）、安井ほか（2017）の論考がそれに当たる。

4. 今後の展望

前回の報告（吉原ほか 2016）では、自由記述欄のコメントをカテゴリー別に整理するにとどめたが、今回は別のアプローチから、愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科と同じく愛知県にある椙山女学園大学国際コミュニケーション学部国際言語コミュニケーション学科の学生から寄せられたコメントに着目した。それはある種の仮説に基づいたものであり、今回の報告をきっかけに、これからの研究の方向性を探っていくための準備である。

その仮説とは外国語学習の動機づけと世界史学習の動機づけには関連性があるというものである。外国語学習の動機づけに関しては、応用言語学の分野である程度認知されている理論がいくつかあるが、本報告で紹介するのは八島（2001, 2002）によって提唱された「国際的志向性」という概念である。この概念を八島（2004）は、以下のように説明している。

> 「国際的志向性」とは日本において「英語」が象徴する「漠然とした国際性」、つまり国際的な仕事への興味、日本以外の世界と関わりを持とうとする態度、異文化や外国人への態度などを包括的に捉えようとした概念であり、英語を用いたコミュニケーション行動に影響を与えると仮定した。（p. 84）

また八島（2004）は、国際的志向性は以下の4要素から構成されるとしている。

> 1）異文化友好オリエンテーション（文化的な英語学習理由）例：いろんな文化を知り、文化背景の異なる人々と知り合えるから。／外国の人と友達になりたいので。2）異文化間接近回避傾向（異文化背景を持った人と関わりを持とうとする傾向）例：日本に来ている留学生など外国人ともっと友達になりたい。／もし隣に外国の人が越してきたら困ったなと思う。3）国際的職業・活動への関心　例：国連など国際機関で働いてみたい。／海外出張の多い仕事は避けたい。 4）海外での出来事や国際問題への関心　例：外国に関するニュースをよく見たり、読んだりする。／外国の情勢や出来事について家族や友人とよく話し合うほうだ。（p. 84）

そして、「国際的志向性とは自己と世界との関わりを意識しているかどうかということに関係する」（p. 85）ので、その意識が強いと「異文化への接近動機が強く、英語でコミュニケーションを図ろうとする意志を持ちやすくなる」（p. 85）としている。そして応用言語学の分野では、国際的志向の強さと英語学習の動機の強さには関連があるという共通認識が形成されている。

昨年の吉原ほか（2016）の報告で、質的データをまとめた際に、世界史が役に立つと述べている学生のコメントが、英語学習の動機づけが強い学生のコメントに類似しているということに興味がわいた。例えば「世界の歴史を知ることで新しい視点で日本を見て、理解を深めることができる」というコメントは、「外国語を勉強すると新しい視点を持てる」という考えにも共通するし、世界史学習の必要性は「世界を知り、グローバル社会に対応するため」にある、というようなコメントは英語が国際共通語として使われている昨今では、広く認知されていることである。

今回、愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科と椙山女学園大学国際コミュニケーション学部国際言語コミュニケーション学科の学生のコメントに着目した理由は、外国語を使ってのコミュニケーションに興味のある学生は、世界史学習の意義も認めているという仮定が成り立つと推測したからである。紙幅に限りがあるので、アンケートに協力してくれた51人（内訳：愛知県立大学13人 ＋ 椙山女学園大学38人）の学生のコメントを全て紹介することはできないが、大多数が、世界史が高校で必修科目であることに肯定的なコメントを述べていたし、世界史学習の意義に対しても好意的であった。肯定的でないコメントもがあったが、それは「受験の為に必要な科目だけを履修すればいいと思うので〇〇の科目は必修だと決めなくてもいいと思います」というものであった。しかしこの学生は次の「世界史を学ぶことはどのような役に立つと思いますか」という質問に対し、「古代から現代までの世界の流れを学ぶことで、日本と照らし合わして、様々な違いを比較するのに役立つと思います」と回答している。受験への負担を軽減してほしい気持ちとは別に、世界史学習の意義は認めていると言える。こういった「負担感」に関しては、鶴島ほか（2015）の分析の中でも言及されている。また他にも「私自身歴史系が好きではないので嫌でしたが、世界の歴史を学ぶことは今の日本社会には必要不可欠だと思う」というものもあった。好き嫌いに関わらず世界史学習の重要性は意識しているということであろう。

以下、特に印象に残った学生のコメントを記す。

質問６：高校で世界史が必修科目なのをどう思いますか

> 私は高校で世界史Ｂを学びました。カタカナの聞きなれない名前や地名を覚えるのにとても苦労し、テスト後になると忘れてしまうことが何度もあり、あまり世界史が好きではありませんでした。でも先生によっては、ユーモアにストーリーを教えてくれる方がいて、ただの暗記教科というイメージが少しなくなったとき、面白いと感じることもありました。（以下略）

この学生が世界史をあまり好きでなかった理由は、暗記が大変だったからであるということは容易に見てとれる。しかし、暗記を別にすれば、その世界史への興味関心を育てることは可能であるということも示唆している。そして「日本だけでなく世界の歴史に目を向けることは必要」としており、その理由は次の質問への回答として述べられている。

質問７：世界史を学ぶことはどのような役に立つと思いますか

> 世界にはたくさんの国がありますが、そうした国の背景や成立にいたるまで、また文化の変化などを世界史を通して学ぶことができ、グローバル化が進む中での異文化理解につながると思います。

この回答はまさに八島があげる国際的志向性にあてはまるものである。また、そのほかにも国際的志向性が見られるものの例として、以下のようなものがあった。

- 外国の歴史を学ぶことで、自分の国とのつながりが見えたり、価値観や考え方の幅を広げる材料になったりすると思います。
- 世界にはたくさんの国がありますが、そうした国の背景や成立にいたるまで、また文化の変化などを世界史を通して学ぶことができ、グローバル化が進む中での異文化理解につながると思います。
- 今の世界情勢に関心が持てる。グローバル社会において、外国へ行くチャンスはきっと増える。外国語系大学に入ったとき困らない。歴史をふまえて日本と海外の比較ができる。

むろんこういったコメントはこれまでの調査報告（鶴島ほか、2013；安井　2011；鈴木ほか　2016；吉原ほか　2016)の中で紹介されているものと同傾向のものである。以上のように、ある程度高校での世界史履修の現状や学生の意識が明らかになってきたわけだが、今後の研究の方向性としては、本報告で紹介した外国語学習者の動機づけや国際的志向性と関連づけて、外国史学習者の学習動機を検討していきたい。2016年の報告（吉原ほか）でも述べたとおり、大学生や高校教員を対象として、特に聞き取り調査や、非参与観察などの研究手法を用いていくことを考えている。それによって、どういった教育方法であれば世界史学習の動機づけが強化されるのか、世界史への興味関心を育てていくことができるのか、ということを明らかにしていきたい。

謝辞：本調査にご協力くださった、近畿大学経済学部准教授岩間剛城氏、山形県立米沢女子短期大学准教授新藤透氏、東北大学高度教養教育・学生支援機構入試センター講師田中光晴氏、東北大学附属図書館情報サービス課参考調査係長吉植庄栄氏の各位に心より御礼申し上げます。

なお、本研究は、岩手県立大学学部等研究費（研究課題名：『世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究―岩手県における世界史教育の現状と課題―』（代表　吉原秋））から助成をうけたものである。

5. 参考文献

小川知幸，吉原秋，小川春美，鈴木道也，安井萠，畑奈保美，津田拓郎（2017）.「高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』，第 19 号, 67-73.

小田中直樹（2007）.『世界史の教室から』山川出版社

鈴木道也，吉原秋，小川春美，安井萠，小川知幸，畑奈保美，津田拓郎（2016）.「大学における世界史教育の現状と課題（1）―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』，第 18 号, 65-71.

鶴島博和，古澤政也，高山直也，古賀亮寛，佐藤慶明（2013）.「世界史教育の現状と課題（1）」，『熊本大学教育学部紀要 Bulletin of the Faculty of Education, Kumamoto University』, 62, 29-56.

鶴島博和，内田開，嘉村潔高，安部統己，江原淳貴（2015）.「世界史教育の現状と課題（3）」『熊本大学教育学部紀要 Bulletin of the Faculty of Education, Kumamoto University』, 64, 41-48.

八島智子（2001）.「『国際的志向性』と英語学習モーティベーション：異文化間コミュニケーションの観点から」，『関西大学外国語教育研究』, 1, 33-47.

八島智子（2004）.『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』 関西大学出版部

安井萠（2011）.「世界史未履修問題と岩手大学生―アンケート調査結果によりながら―」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』，第 10 号, 23-35.

安井萠，吉原秋，小川春美，鈴木道也,小川知幸，畑奈保美，津田拓郎（2017）.「世界史学習に関する岩手大学生の意識調査」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』，第 16 号（近刊）.

吉原秋，小川春美，鈴木道也，安井萠，小川知幸，畑奈保美，津田拓郎（2016）.「世界史履修に関する短大生の意識調査」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』，第 18 号, 59-64.

Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54-66.

註

1　岩手大学では入学者選抜に際して大学入試センター試験で地歴・公民の中から最低 1 科目受験することを課している。従って、回答者全員が母数に含まれる。